

堀川の現状と産業遺産

ポリテクセンター八幡
(八幡職業能力開発促進センター)

青地 学

1. はじめに

堀川は筑豊地方の遠賀川の下流から洞海湾に通じる全長約12kmの人工運河である。当初は治水を目的として開削されたが、その後筑豊で産出された石炭の輸送で重要な役割を担った。しかし、運河としての役割は鉄道輸送の普及により終えた。その堀川についてまず歴史の概要について触れ、現状と産業遺産について報告する。

2. 堀川の歴史

慶長5年(1600年)当時、遠賀川は現在のような完備した堤防がなく、大雨になると氾濫して流域に甚大な被害を及ぼした。そこで、洪水による被害を視察した福岡藩主黒田長政は、遠賀川の間村付近から洞海湾へ通じる川を掘れば遠賀川の水勢が緩和できると考えた。幕府の許可が下りた元和7年(1621年)に工事が開始され、長政の死去後128年間工事の空白期間があったが、文化元年(1804年)に完成した。堀川は完成後、洞海湾への水運に利用されるとともに、流域の田地を潤した¹⁾。

幕末になって筑豊の遠賀川流域の石炭が瀬戸内沿岸の製塩に使用されるに及び、石炭輸送のため結果的に水運の役割が大きくなった。しかし、明治24年(1891年)若松～直方間に鉄道が開通し、鉄道網が整備されるに伴って堀川の水運はその役割を終える。また、昭和47年(1972年)に、堀川沿いにパイプによる送水が可能となったことで利水面での役割も終えた。堀川の年表を表²⁾に示す。

表 堀川年表

西暦	年	ことがら
1620	元和6	福岡藩主黒田長政が遠賀川を視察
1621	元和7	堀川工事始まる
1623	元和9	黒田長政死去により工事中止
1751	寛延4	車返の切貫き着工
1757	宝暦7	車返の切貫き貫通
1759	宝暦9	車返の切貫き拡張
1762	宝暦12	洞海湾に通じる
1762	宝暦12	中間唐戸完成
1763	宝暦13	堀川通船開始
1804	文化元	取水口を寿命唐戸に移転
1899	明治32	堀川通過船数年間13万艘を超える
1939	昭和13	堀川の水運が歴史を閉じる
1972	昭和47	堀川沿いのパイプ送水工事完成

3. 現状と産業遺産

堀川の実地調査を行った結果を上流側から順に報告する。堀川の略図を図1³⁾に示す。



図1 堀川略図

堀川の取水口が後述する下流の中間唐戸であった当時、水量を十分に確保するため遠賀川に堰が設けられた。この堰により上流で洪水が発生したため、取水口が中間唐戸より上流に移され、図2に示す寿命唐戸が設けられた⁴。現在の取水口には鋼製の水門が別に設置されている。



図2 寿命唐戸

図3に示すように、寿命唐戸を経た遠賀川の水は十分な水量を得て堀川となり、その後は笹尾川と合流して中間唐戸へと至る。



図3 堀川（寿命唐戸～中間唐戸）

図4に示す中間唐戸は、堀川が洞海湾へと通じた当初の唐戸が洪水の度に壊れたため、備前吉井川の唐戸の構造を参考として、惣社山の岩盤を開削して築いたものである。

図5に示すように中間唐戸から下流になると水量はわずかとなって三面コンクリートの低部を流れて

いるにすぎない。

そこから下っていくと図6に示すように今の堀川には伏越といわれる曲川との立体交差はなく、曲川に合流してそれより下流の堀川には遠賀川からの水は流れ込んでいない。このように現在の堀川は分断された状態にある。

図7は車返の切貫の側面で、現在の河守神社から下流約400mの岩盤区間を、鑿と鎚により9年かけて開削し、現在もその鑿による開削跡が見られるものである。この区間については開削当初の様子がよく保存されている。



図4 中間唐戸



図5 堀川（中間唐戸～車返の切貫）



図6 曲川により分断された状態の堀川



図7 車返の切貫

図8は前述の車返の切貫からほど近い折尾高校に保存されている，筑豊の石炭を堀川経由で洞海湾へと輸送するのに使われた「川ひらた」とも「五平太船（ごへたぶね）」ともいわれる船である。



図8 川ひらた

図9は，前述した川ひらたを係留するために用いられた舳石（もやいいし）の現存位置を示したものである。その舳石の詳細を図10に示す。往時には川ひらたを土手の上から引いて戻ったことから，水面から高い土手の上に存在することが理解できる。



図9 舳石の位置（矢印により指示した箇所）



図10 舳石

図11に示す折尾駅付近では川筋の堀川町に飲食店が建ち並ぶ。駅前周辺では近年の再開発により堀川は暗渠となり，その付近は三面コンクリートの構造であるが，往年の写真では川筋に柳の木が並ぶ風情のある風景となっている。



図11 折尾駅付近の堀川

折尾駅前を抜けると堀川は暗渠を出て，三面コンクリートの構造のまま洞海湾へと至る。

4．おわりに

堀川は田園地帯，折尾中心の繁華街を横断して洞海湾に至る運河で，市民の生活圏に存在し，苦心の末に完成した唐戸や，過去の日本人のバイタリティーと労苦を感じさせる鑿跡が残る車返の切貫きなど貴重な産業遺産に恵まれている。その一方で，現在の堀川の大部分が3面コンクリートに囲まれて往年の面影はなく，巨大な側溝の様相で川の潤いを感じさせない残念な側面も持っている。

この堀川の再生を願う流域の中間市，水巻町，北九州市の市民からなる「堀川再生ワークショップ」が月に1度のペースで開催され，さまざまな意見が

出し合い議論が重ねられた。堀川再生への機運の高まりは図12に示す堀川一斉清掃や堀川を題材としたコンサートなどのイベント「堀川コラボ2003」につながっている。



図12 堀川コラボ2003での一斉清掃

図13に示す「第2回わいが堀川塾」では前述した堀川再生ワークショップでの成果発表や、今後の展開の可能性について意見交換がなされた。



図13 第2回わいが堀川塾

図14～図16は、堀川の水運が歴史を閉じた今なお街にみられる「川ひらた」であり、堀川とその歴史が地域の財産として認識されていることがうかがえる。今後の堀川の歴史を生かした再生が期待される。

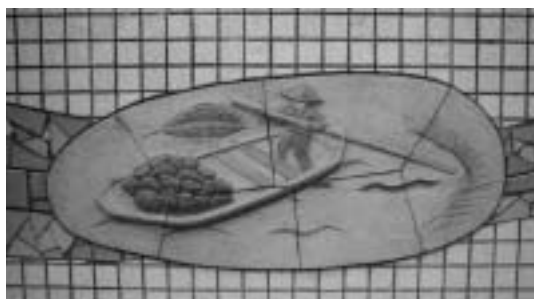


図14 水巻町南部公民館の川ひらた



図15 折尾駅の川ひらた



図16 中間市民図書館の川ひらた

【謝辞】

この調査にあたって御教示を頂いた北九州市八幡西区役所まちづくり推進課の方々、中間市歴史民俗資料館の長谷勝弘氏に謝意を表します。

<注>

- 1) 水巻町誌編纂委員会『増補 水巻町誌』水巻町, 平成13年6月, 107頁。
- 2) 中間市史編纂委員会『堀川の歴史と文化』中間市教育委員会, 発行年不詳, 2頁。
- 3) 桑原三郎, 他『日本の産業遺産』玉川大学出版部, 昭和61年3月15日, 174頁。
- 4) 林 正登『遠賀川流域史探訪』葦書房有限公司, 平成元年12月15日, 154頁。